

開催地の先生方にすべてをお願いしてきましたが、これについても ASPP のように本部が年会・シンポジウムの実務を担当できれば、開催地の負担はある程度軽減できると思われ

5. おわりに

JSPP が創立されて40年間の歴史をたどり、これまでの先輩諸先生方のすぐれた卓見と非常なご努力によって国内的に

も国際的にも発展してきた JSPP の過去と現状を述べてきました。改めて、これまで JSPP のお世話をいただき、その発展に寄与していただいた多くの先輩諸先生方に、会員諸氏とともに、心から厚くお礼を申し上げます。今後、21世紀での JSPP 創立50周年、100周年に向けて JSPP がさらに発展するよう、会員諸氏のご協力をお願い申し上げますとともに、そのためのご意見をどしどしお寄せ下さいませようお願い致します。

10. PLANT AND CELL PHYSIOLOGY: 論文投稿状況にみる現状、課題および将来

編集長 杉山 達夫

1959年12月に記念すべき1号として発刊された本誌(資料4)は今日まで一貫して PLANT AND CELL PHYSIOLOGY の誌名で成長を遂げ、学会創立と期を等しく40周年を迎えました。本学会創立の最大の目標は学際的で優れた学会誌を発刊することであったと聞いております。目標の達成とともに、40年間にわたりたゆまざる努力と熱意を傾注された編集長、編集実行委員、編集委員および会員の先達に深甚の敬意と謝意を表します。

40年間にわたり本誌は編集上のさまざまな変遷を経てきました。その概要は浅田会長によって、この学会通信に学会活動として記述されております。ここでは先ず、発刊の歴史を象徴的に実感しうる PCP 表紙の変遷をご紹介します。創刊後28年間 B5 版サイズを保持した本誌の表紙は古谷雅樹編集長時代から話題に上り始め、1988年1月号(今関英雅編集長)から大版化に移行して、現在のサイズ(A4版)になり

ました(表紙写真2)。ついで、本学会で採用となった学会ロゴマーク入りの表紙デザインが1993年1月号から(柴岡弘郎編集長)登場し(表紙写真3)、やがて1997年1月号(浅田浩二編集長)にフルカラー表紙に刷新され(表紙写真4)現在に継続されています。これらの表紙デザインの変遷は PCP 読者拡大の施策として行われたものであり、折々の読者の志向を反映したものであると思われ

ました。本誌は“植物と微生物の生理、生化学、分子生物学、細胞生物学の領域の論文を発行する一級の学術雑誌”であることを標榜に、高い質の論文、迅速性と購読者の拡大を求めて編集が進められてきました。その結果、今日学会が自負しうる学術雑誌としての地位を築き上げてきました。この目標は当面変わることはない、普遍的なものでありましょ

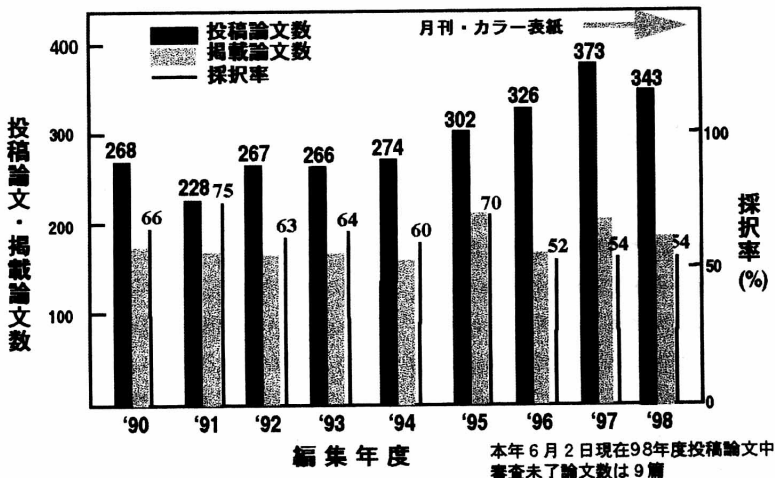


図1 '90年代における PCP 投稿論文数、掲載論文数、採択率の推移

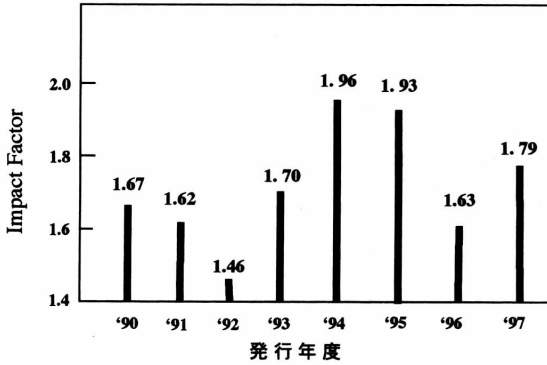


図2 '90年代にみる PCP の Impact Factor の推移

は重要であります。ここでは、1990年から現在にいたる投稿論文数、採択率等の統計的数値を基にして、本誌の現状を紹介し、読者とともに課題の把握を試みたいと思います。

【国内からの投稿論文数の推移からみた現状】

90年代初頭からは投稿論文の審査が完了した98年度まで、9年間にわたる本誌の年度別投稿数と掲載論文の採択率をパラメーターとして現状解析の糸口と致しましょう(図1)。投稿論文数は、全体としては、増加の傾向にあり、その傾向は95年から97年にかけて顕著であります。一方、この9年間、年度別の掲載論文数はほぼ一定でありました。したがって、採択率は投稿論文数の増加にともない低下したことが明らかに認められます。投稿論文数の増加と採択率の減少には少なくとも2とおりの説明が可能でありましょう。一つは本誌の掲載論文の質的な向上であり、他は投稿論文の質の平均的な低下であります。どちらの見方が妥当かは容易ではありません

が、私は基本的には前者の解釈が妥当と思います。その理由は、学術雑誌のいわば“他者評価”として昨今流布し始めた Impact Factor の本誌に対する値の推移にうかがうことができるのでありましょう(図2)。その値は最近の8年間で増減の幅が見えますが、前半3年にくらべ後半には概して増加しています。この間、当該領域の学術情報誌の種類と数が急増したことを考えますと、このファクターの全体としての推移は本誌の評価向上を裏付けるものと見受けれます。

Impact Factor のもつ評価基準としての妥当性には論議の余地があると思いますが、この評価基準は今後一人歩きを益々強めるでありましょう。

図1のデータが示す傾向の一つとして気がかりなことは、97年度から98年度にかけての投稿論文数が減少していることでもあります。この減少は一時的な増減幅に入る数値かも知れません。しかし、編集に携わる者としては、考えるべき課題を秘めているように思います。この期間の編集データのうち、国内会員からの投稿論文に関するデータに焦点をあててみましょう(図3)。当該年度での国内会員からの投稿論文数もまた総論文数での比率もともに急落しています。このことは98年度の投稿総数の減少は国内からの投稿数の減少に帰因していることが明白であります。しかし、この状況でも、図3内の表の数値にありますように、国内からの投稿論文の採択率は低下せず、この3年間ではむしろ98年度の値は最高であります。これらのデータは当該年度の国内投稿論文は“つぶぞろい”であり、評価の高い論文が相対的に多かったことを示します。

98年度の国内における投稿状況におけるこの変化は一時的

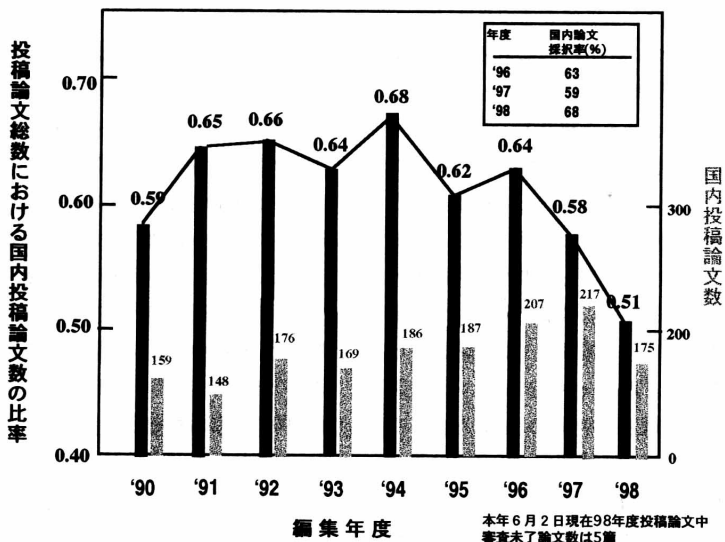


図3 '90年代における国内会員からの論文投稿状況

